

お嬢様の命令は絶対で  
すっ!! ?

亜音速のエリート帰宅部

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

四条真妃には一人の従者がいた。彼はマルチーズの二倍くらい忠誠心を持ちながらも、程よいワーク・ライフ・バランス・を目指し、主人の無理難題の命令をそれとなく躲しながら奉仕するのであった。

# 目次

一話 四条真妃は救われたい | 1



# 一話 四条眞妃は救われたい

「ヨハン、柏木さんを寝取りなさい!!?」

ある日の就寝前の事だった。寝室にて四条眞妃は携帯の電源を切るや、急に変な事を言い出したのだ。

柏木とは四条の同じクラスメイトの親友である。そして、一ヶ月前程から彼女は同じクラスの田沼と付き合い始めていた。

「お嬢様、夜も更けてきましたので、もうお休みになってください」

しかし、従者であるヨハンは華麗にスルーした。彼は元殺し屋であり、四条の執事であり、メイド長という超謎めいた肩書きを持つ男である。彼は五年前から四条眞妃の従者として雇われていたが、近頃の主人は半分は可愛そうで半分は面倒くさいに病んでいると思っていた。

「ちよつとヨハン、スルーしないでよ！主人の命令よ。柏木さんを寝取りなさい!!?」

「それで傷心した田沼さんの心を驚掴みという訳ですか」

ヨハンは溜息混じりに言った。どうせ、さつきまで携帯でカップルを破局させる方法でも調べていたのだろうと予想していた。

ヨハンの主人である四条は現在失恋中であつた。詳しく言えば、親友である柏木に好きな男子を取られてしまつていたので。

ただ以心伝心、従者が語らずとも自分の考えを察してくれたのが嬉しかったのか四条はニヤリと笑みを浮かべて言つた。

「その通りよ！流石はヨハンね。私の執事を務めているだけはあるわ！」  
「お褒めにいただき光栄です」

ヨハンは浅くお辞儀をして、その言葉を受け取つた。しかしヨハンは主人が一つ致命的な問題を忘れてゐるようなので意見しておく事にした。

「しかしながらお嬢様、私がお嬢様と共に通学している秀知院学園にて、どのような立場にゐるのかお忘れではないですよね？」

「あー！」

四条は今頃になつて思い出したようで、ヨハンを見つめて表情を硬直させた。それを見て、ヨハンは少し呆れた様子で言つた。

「いや、本当にすっかり忘れていました、みたいな顔をしないで下さいよ。私の主人なんですから。どうして男である私を女装させて通学させていることをお忘れになるのですか？」

これにはヨハンも不満しかなかった。かつて高校に入学する時、思春期真っ只中で

あつた四条はヨハンに言った。「高校生までになつて、男子の付き添いがあるとか恥ずかしいんだけど。え？ならどうすれば良いかだつて？そうね、同じ女子同士であるなら恥ずかしくないとと思うから……。そうだ、高校から女装しなさい。アンタは良い意味で中性的な顔付きをしているから、きつと似合つてると思うわ」と。

そして、そんな横暴な命令にてヨハンは女子として秀知院学園に通学している訳だが、その上で男として女を寝取れなど、どうしようもない主人に思えた。

「だつて、ヨハンしか頼める人がいないんだもん！」

ただ、そんなあからさまに不満な態度を取られると思つていなかったのか、四条はオロオロと戸惑いながら言った。まあ、普通に考えて間男を演じろと言われて、やつてくれる人はなかなかいない。ヨハンのみが唯一頼れる存在であつた。

ただ、そんな不安そうな彼女を見て、ヨハンも人であり、四条の執事であるので、「お嬢様は馬鹿ですか？」なんて本音は心の内だけに留めておくことにした。そして、機嫌を損ねないように、やんわりと言葉を選びながら命令を撤回させるように説得することにした。

「まあ、私にかかれば不可能ではないと思いますが、本当にそれで宜しいのですか？もし、私が柏木さんと付き合つたとしても、お嬢様が田沼さんと交際できるとは限りません。いや、それどころか田沼さんが二度と女性の方と付き合うことが出来なくなる恐れ

があります」

「どういふこと？」

女性の方と付き合えなくなる。そんな不穏な言葉に四条は真剣な形相で食い付いた。その反応を見て、ヨハンはより深刻そうな口調で言葉を続けた。

「女性不信に陥るかもしれないという事です。とくに彼の場合は初めての交際相手ですので、寝取られ時のショックは相当なものになると思われます」

「なら、私が傷付いた田沼君の心を慰めてあげれば良いだけじゃない！」

「女性に裏切られた人が女性の言葉を信じられるとお思いですか？」

「うっ！」

四条は反論が浮かんでこなかったようで、身を引いて言葉を詰まらせた。まあ、もちろん、そんなことはないだろうと思いつつも、それでも主人の命令を拒否したかったので、さらなる嘘を重ねた。

「それに、おそらくですが、彼は男に目覚めます」

「男って……？ それって、いわゆるボーイズラブになっちゃうってこと!!？」

四条は赤面した。四条家は世界に名だたる財閥グループである。その長女として生まれた彼女は令嬢に相応しい教育を受けていた。そのため男色などといった、ちよつとディーブな色事に対しての耐性を持っていなかったのである。



「はい、そうです。私的には、傷心した田沼さんは恋愛相談を持ちかけた白銀御行に失恋相談事をすると考えています。そして、ぽっかりと開いた心の穴を埋めるために相談の回数は増していき、次第にそれは友情から恋情へと移り変わり、ゆくゆくは一線を越える関係になるだろうと予想しています」

まあ、ありえない予想であつた。というか、ここまで来ると普通に嘘である。だいたいヨハンの知る限りの情報では白銀御幸は四宮家のご令嬢と親しい間柄にあると噂されているのだ。まあ、所詮は噂であり、二人が生徒会業務以外で共にしていると噂は確認できていないが、火のない所から煙は上がらない。現に白銀御幸の一年から今にかけての特異性な成長具合を考慮すれば十分に有り得ることであつたし、彼の義理堅さと執着心からすれば他の女、ましてや男に心移りをするなど考えられなかつた。

ただ予想と言え、0.000001%の可能性があれば、可能性さえあれば許さような気がしたので、ヨハンは言ってみたのである。

「そんな……それじゃあ柏木さんを寝取らせても、私は田沼君と付き合えないの?」

四条は涙目を浮かべてヨハンは訊いた。

四条にとつては、田沼がこのまま柏木と付き合おうとも、田沼が柏木と破局して白銀と付き合うようになっても、自分と交際できないのであれば悲劇であることには変わりはない。

ただ、流石のヨハンもマルチーズの二倍ぐらいの忠誠心を持つ従者である。主人に悲しげな表情で見つめられては「はい、そうですよ」と言つて無情に突き放すことはできなかった。なので何か気の利いた言葉はないかと思案した。そして思い付いたので優しく語りかけた。

「ええ、その通りです。ですが、それでいいのです。そもそも誰かを傷付けてまで自分だけが得しようなんて考えが間違つています。そんなやり方では、もし仮に幸福を掴めたとしても長続きせず、ゆくゆくは手からすり抜けてしまふでしょうから」

それは四条家が四条家であるが所以の言葉であつた。四条家は、かつて日本が高度成長期を迎えた時、法や道徳を顧みず利益のみを追求する方針を掲げた四宮家から離反した者達から生まれた一族である。だからこそ、四条家の娘である四条眞妃はその言葉を聞き捨てることはできなかつた。

「そうだけど……」

四条はそれ以上の言葉は続かなかつた。しかし、自覚していても、どうしても抑えることができない気持ちがあることを訴えるかのように四条はヨハンを見つめたのだ。

その表情を見てヨハンと思う。

ロミオとジュリエット、伊豆の踊子、ピグマリオン、古来からの文学者が語るように恋愛感情とは家柄とか身分とか理屈だけでは抑え切れるようなものでない。それはヨ

ハンは理解していた。だからこそ、ヨハンはそれらの肩書とは関係なく四条真妃という一人の人間そのものをじつと見つめて、語りかけることにした。

「それに、もし仮にお嬢様が思い描く筋書き通りに全てが上手くいったとしても、心優しいお嬢様はきつとこう思われるはずです。『本当にこれで良かったのだろうか。大切な親友と恋人を傷付けてまで手に入れた幸せに何の価値があるのだろうか』と。私はお嬢様の恋情が成就することを応援しております。ですが、自分の心を誤魔化し続けなければならぬような恋愛はして欲しくありません。そんな恋愛をしていては今以上の苦しみを味わうことになります。ですから、どうぞ、考えを改めください」

そうヨハンが告げると、四条は思うところがあつたのか、ポロポロと涙を流しながら言った。

「そうだよね。なんで、そんな酷いこと考えちゃつたのかな。私って悪い子なのかな？」  
「そんなことはありません。お嬢様は心優しく素敵なお方です。どんなに苦しくても、どんなに悲しくても、過ちを恥じ、正しい人としての在り方を忘れない強さを持つておられます。それは簡単なことのように思われますが、並大抵のことではありません。ですから、そう卑屈にならないで下さい。お嬢様はありのままに魅力ある人なのですから」

ヨハンがそう慰めると、四条は少しは気持ちが悪くなったようで、赤く染まった目元

を細めて、ニコリとあどけない笑みを浮かべた。そして、どこか憑物が落ちたような口調で言った。

「ありがとうヨハン、何だか救われた気がするわ」

「いえ、忠実なる従者として当然のことを言ったまでですから」

ヨハンは相変わらざるの穏やかな表情でそう告げた。四条にとつてヨハンは昔からそうであつた。初めてあつたときから忠実ではあつたけど決して従順ではなくて、道を踏み外しそうになつた時はいつも止めてくれて、どんなに危機的な状況に陥つたとしても絶対に助けてくれたのだ。

そう思い返したら、ヨハンをも田沼と同じくらいに暖かくて一緒にいて安心できる人だと感じられた。だからこそ、もしもの話として訊いてみた。

「ねえ、もし私と付き合つてつて言つたらヨハンはオツケーしてくれる？」

「いえ、現在、交際の彼女がいますのでお断りします」

「くたばれ、この裏切り者！」

四条はヨハンの顔に枕を投げつけて部屋から追い出した。やはり、このクソ執事は非常識で薄情者で恥知らずの役立たずである。四条は今月の給料を減俸してやることを決意したのであつた。

本日の敗者

ヨハン

（今月の給料が半分以下に減俸されたため）